

2018年05月24日 1面

文字サイズ      

地域を興す－長大の挑戦・中／高い品質を担保する日本流／安定した事業運営可能に



取水堰



運用が始まった上水供給施設

長大がブトゥアン市の地域開発で信頼される企業になった要因は、日本の製品や日本式の事業手法にこだわった質の高いサービスを提供してきたことが挙げられる。

4月30日に竣工したアシガ川小水力発電所の発電機は富士・フォイトハイドロ製、タギボ川上流部に完成した上水供給施設の送水管は栗本鉄工所製が使われた。上水供給施設は、長大と地元企業で構成する特定目的会社（SPC）が今後25年間にわたり、ブトゥアン市水道公社に代わって市全域に1日当たり3万トンの上水を供給する。

同市で行われるPPP事業を統括する宗広裕司事業推進本部事業企画部長は「日本企業を使うのは技術の高さに加え、彼らが保有する品質管理の力に期待するからだ。安定した事業運営が可能になる」と自信を見せる。

工事分野でも同様に、長大グループが全面的に支援する。タギボ川上流部に完成した上水供給施設の施工監理は長大が担当。ア

シガ川小水力発電所の導水管の敷設は長大グループの基礎地盤コンサルタントが監理を担った。アシガ川に建設した取水堰から伸びる導水管の横は切り立った急斜面で、斜面からの落石にどう対処するかという課題があった。対応策として導水路を石積みで覆い、その周囲にコンクリート製の厚い壁を構築した。同社の岩崎公俊社長は「落石による管路の破断リスクを排除するとともに、見栄えも考慮した」と強調。青野史規営業本部新事業開発部長は「日本の技術の見せどころで、地元からの信頼を獲得する上で気が抜けなかった」と振り返る。

日本の優れた製品や技術の提供にこだわる長大にとって怖いのは他国製品の納入だ。「アシガ川小水力発電所の事業費30億円強のうち、プラントコストは3割ほどだった。進行中のもみ殻を使ったバイオマス発電事業は事業費の6割がプラントコストとなる見通し」（宗広部長）といい、安定した事業運営には施設も設備も高い性能が要求される。

アシガ川小水力発電所に発電機を納入した富士・フォイトハイドロはSPCの了承を得て、インドの工場で作成した発電機を納入した。同社の笠原佳吾社長は「これからは良いものだから高いという発想は通用しない。日本製と同じ品質を保ちながら価格を抑えた製品を供給することが、次の受注には大事になる」と話す。

将来の水需要の増加を考慮し、稼働したばかりの上水供給施設の隣では供給量を1日当たり3万トンから8万トンに引き上げる増強工事が計画されている。SPCが年末に着工し、20年の稼働を目指す。宗広部長は「増強工事でも送水管や浄化設備などは日本製品を採用したい」と考えている。高品質にこだわる長大の仕事は現地の関係者から、日本の優れた技術を伝えるという意味でも高い評価を得ている。

閉じる

記事ID : 3201805240102

---

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます